

平成17年 元旦 無災害を祈る



田原市蔵王山より太平洋の日の出 7:10

も
く
じ

1. 新年に思うこと (会長 太田貴代子)
2. 今、役員会は・研修部だより(事務局 蜂須賀・研修部 山口)
3. 特集「インド洋津波」(松沢)
4. 各ブロックからの情報発信
 - ① (西三河 B)
 - ② (知多 B)
 - ③ (海部 B)
 - ④ (名古屋 B)
 - ⑤ (尾張 B)
 - ⑥ (東三河、新城設案 B)
5. コミュニティーと防災(西三河 間瀬 ・東三河 酒井)
6. 防災よもやま話 愛知から始まった日本の防災 (名古屋大学 福和 伸夫)

新年に思うこと



APLA 会長 太田 貴代子

今年も1.17 が訪れました。神戸で被災された人々は、この10年間は、遅く復興に向けて連日報道される中で被災後生活が困難を余儀無くされ、癒えず苦しみの中での生活をされている方々も多い映像に胸が痛む思いです。今なお豪雪の中での不自由な暮らしをされて、復興の目途も立たない中越地震被災者の皆様の苦労や、また12月26日のスマトラ沖地震の津波の被害は想像を絶する広範囲の被災地の災害は日を追うごとに被害も増大され、いまや死者18万人を超えた、目を覆うばかりの悲惨に、いかに自然の威力に人間ただただなすすべもないものかと、空しさを感じておりますが、もし被災者が地震の怖さや、津波についても警戒の知識や情報等が住民や観光客にもあったなら、もう少し被害が食い止められたのではないのでしょうか。

私達あいち防災リーダー会は地域での地道な防災啓発活動の必要性を改めて感じており、責任の重さも同時に感じます。

1月16日は「防災&ボランティアフォーラム2005」がオアシス21、NHKなごや放送センタービルで開催され、多くのボランティア、市民が参集し各ブースは地震に対して熱心に体験や防災器具等のコーナーは賑い、阪神・淡路大災害から～10年過ぎた今、危機感、実感を改めて肌で感じたことでしょう。

また中区役所ホールでは、「高校生防災セミナー」の実践は発表会が開催され、あいち防災リーダー会会長として講話の機会がありました。

県教育委員会も今後『高校生の防災リーダー』を育成していくそうです。

リーダー会もこれを機に各地域での高校防災啓発活動の足がかりになれることを望んでおります。

今後は産学官民での共生で防災啓発活動が進められるように努力をしたいと思っております。

最後になりましたが、地域を守るリーダーとして、益々会員各位の地域での活躍に期待しております。



役員会は今？



事務局 蜂須賀 博英

初年度の活動の問題点を改善する目的で提案された新役員体制が、会則の改訂を提案しないまま定期総会の場に臨み混乱を招くことになってしまいました。総務委員会で会則の見直しを行い、臨時総会を開催する事をお約束して、総会は収める事ができました。毎月のように開催し検討を重ねた総務委員会から役員会に提出された改定案について、異議申し立てがあったことから再び混乱が起き、11月に予定しておりました臨時総会は延期することになりました。設立総会の前にも会則の検討に膨大な時間を費やしました。昨年も総務委員会で会則の検討に膨大な時間を費やしました。あいち防災リーダー会の活動目的は、いったい何なのか？会則の検討をする事なのか？と自らに問いたくなるような一年でした。

あいち防災カレッジを修了し「あいち防災リーダー」の称号を愛知県知事より頂いた者たちが、より活動がしやすいようにネットワークを創ろうということで、有志が世話人会を組織し、会の設立に向けて検討を重ね、平成15年6月に設立総会を迎えることができた。

一方で平成14年12月のカレッジ終了と同時にブロックや市区町村単位での会を作り、会費を集め活動を始めるところもあった。こんなことから、あいち防災リーダー会の会費、そのブロックでの会費、市区町村単位の会での会費を納めることになった会員もできてしまいました。

極少数ではありますが、あいち防災リーダー会には入りたくないが、市区町村単位での会には入りたいという人も現れました。本来、あいち防災リーダー会の中にブロックがあり、ブロックの中に市区町村の集まりがあるはずのものが、こんな不具合な状況になってしまっていることを、会則の検討とともに改善していくことが、2年目の残された課題ではないでしょうか？

東海地震、東南海地震のタイムリミットは刻々と近づいていることを肝に命じて、防災リーダーが地域で活動しやすいような組織にしていくように役員の皆さん頑張りましょう。



平成16年を回顧し、新年を迎えて

研修部 山口 悦雄

あいち防災リーダー会は、おおきな課題を残して越年となりました。それは、組織の根幹をなす会則改正案がまとまらず、11月20日に予定された臨時総会が中止となり、次への対応も先送りとなって終わった事は、今後のリーダー会存続に大きな不信感と不安を残す結果となったと思うのは私一人だけではないと思います。

信頼を失い、魅力のない組織はやがて崩壊の道を進んでしまうおそれもあります。

こうした状況のなかで、広域にわたる組織を否定するものではありませんが、もっと大事なことがあることを忘れる事は出来ません。愛知県が何故「防災カレッジ」を開講し、多くの「防災リーダー」を養成する必要性があったのか、平成16年の世界的大災害の連続で緊急的対策が急務な時、防災リーダーの減災につなぐべく細やかで、スピードを伴った啓発活動が必要だからではないでしょうか。新しい年を迎え今一度原点に立って、リーダーが自己の地域からすくなくとも犠牲者を出さない活動となる年となるよう「根気、やる気、信頼」と「仲間づくり」ではないでしょうか。

1月2日から15日までの2週間 スリランカ南部のHAMBANTOTA海岸を右廻りで
COLOMBOまでの全ての海岸200Kmを回って状況を見て撮影しました。

宿泊、日本に来ていた留学生（スリランカの方）の家族、親戚、軍隊の宿泊所などに宿泊。

食事、毎日弁当を作り食事了、水はペットのミネラルウォーターのみ。

車、家族所有のハイエースで終始行動した。

活動、地元の親戚の話で、お寺の避難所に行きそこの軍隊から4箇所の避難所情報を頂き活動した。

内容、BATADUWA・WIMALAGOTHI・IKWELLA・DIKWALAの

お寺4箇所を訪問。

1、BATADUWAでは漁師の住宅64軒と孤児80人の家がほしい

2、WIMALAGOTHIでは避難所がせまいのでテントがほしい。

3、IKWELLAでは井戸用ポンプが故障なのでポンプがほしい、停電するので夜の照明がほしい。

4、DIKWELLAでは被災者の生活支援がほしい

以上の4件で今出来る事は、テント、ポンプを調達し設置出来る、

6日、太陽電池とインバータ、LED照明を被災された親戚に渡す。

8日、太陽電池とバッテリー、照明（23w×3個）を設置

9日、テント（4m×12m）をコロomboで購入しお寺に設置。

12日、ポンプの設置は1月15日にスリランカテレビに放映された。

被災地の撮影は4000枚程度撮影しましたが、家族に死者が出た家庭では白旗を掲げる風習な
ので、海岸沿いでは多く見られました。

南部のHAMBANTOTAの未亡人の家庭では収入源が無いので中古のミシンが多くほしい、
との話が多く聞かれた。

偶然津波の写真も手に入りましたが、潮が引いて押し寄せる状況が判りました。

最後にチェとして、

1、外国でボランティア活動をする場合、写真の入ったIDカードが無いと信用されません。

2、かなづち、ドライバー、ノコギリ、バール、ガムテープ、ひも、ペンチなどは役に立ちました。

3、太陽電池を持って行きましたので、電源に不自由はありませんでした。

4、デジタルカメラの電池は予備5個、充電器2個、メモリー6枚（2GB）持って行き、毎日
パソコンにコピーしたので、1日中撮影することが出来ました。撮影した容量は4GB

5、暑くても長袖、長ズボン、帽子、革の長靴、虫刺されの薬、飲み水は店で売っているミナラル
水、簡易浄水器、スプレーの消毒薬、などの装備で、健康にて帰ることが出来ました。

6、特に役立ったのは、水が無くても消毒できる”スプレーの消毒薬、目薬、ノドの薬、ノドあ
め、サランラップでした。ラップはコップ、皿を洗わなく良い、

スプーン、はし、コップ、皿 は当然自前の物を持って行きましたので、衛生状態は良い。

<編集担当>

防災リーダー会のHPがほしい・・・メールは大変。6号は尾張B 望月さんです。

ブロック情報発信6

APLA
あいちの防災リーダー会

1. 地域コミュニティと防災

西三河ブロック 鈴木 吾朗

私の住む町は、東西に国道一号線が通り、名鉄本線に隣接する安城市北部地区にあります。郷中（ごうなか）といわれる根っからの地元住民と、マンション群などの新興住宅、また商業・工業・農業の混在する、いわゆる何でもありの地区です。

この地域は、「コミュニティ」の数も多く、団体組織・枠組みが多く存在し、各コミュニティでもさまざまな活動・イベントが行われています。個人で「防災」を考える時、この「コミュニティ」を町内という単位での活動と限定しています。いわゆる歩いて活動できる範囲です。私の「防災リーダー」としての活動は、町内の各団体との「橋渡し役」の活動です。つながり役・つなげ役と言っても良いのかもしれませんが、一人でできる事、「身の丈でできる事」から始めています。子ども会では、子どもたちと一緒に走り回ったり、泣き笑いしたりする親の役割。また高齢者とは、地域の歴史や人生観を聞いたり、一緒に食事をしたりする子や孫の役割。町内会組織では隣組としての役割。いろいろな役割を、多くの人と活動しながら経験させて頂いています。

その多くの活動と経験の中で「つながり」ができ、知った顔が増え、〇〇子ども会の〇年生の女の子のお祖父ちゃんと一緒に運動会で走ったとか、〇〇さんの孫の△△ちゃんと一緒に神社の神輿をかついだとか、〇〇さんの奥さんとIT勉強会に参加したなど、その時々話題が豊富になってきます。

昭和の時代、隣組組織の皆さんが経験してきた事を、ただ繰り返しているにすぎませんが、こんな「つながる活動」が、いざという時の「防災力」になると信じています。

注：「防災」を個人ではなく、組織としての活動は「別次元」の話となります。

昨年の活動（画像）<http://www.anjo.npo-jp.net/2004/tyounaikai/1219/>

問合せ先：（安城市）鈴木吾朗 goro@npo-aichi.or.jp



2004年 町内ふれあい運動会

2. 知多市防災リーダー会活動開始

知多市防災リーダー会 桜井 衛

昨年5月、平成14、15年度防災カレッジ修了者12名で知多市防災リーダー会を設立し、防災啓発活動を始めました。

8月28日に開催された知多市総合防災訓練（夜間訓練）において地震体験コーナー、ぶるる君コーナー、煙体験コーナー、防災備品・パネル展示コーナーを運営しました。

10月23日、24日には、知多市産業まつりに防災のブースをいただき、地震体験コーナー、ぶるる君コーナー、伝言ダイヤル（171）体験コーナー、防災備品・パネル展示コーナーの運営を行いました。23日は、地震体験コーナーが長蛇の列ができ大変盛況でありましたが、ほかのコーナーは閑散、翌24日は、前日に新潟県中越地震があったため、各コーナーとも盛況のうちに幕を閉じることができました。

ここで笑い話を二つ

①ぶるる君コーナーへの来場者で“地震に強い家はどこのメーカーか”と単刀直入に聞く人が多く、対応に困ってしまいました。阪神淡路大震災では、どこそこのメーカーの家は倒壊しなかったですと答えるのが精一杯でした。

②簡易トイレ（テント付）を展示していたら、実際にオシッコをした人（子供）がいて後片付けが大変でした。



ブロック情報発信 6



3. 海部ブロックだより

――西尾張ブロックボランティア集会・海部ブロック交流会――

今年初めての海部ブロック行事で、1月23日（日）津島市文化会館にて各ボランティア団体が集まる「西尾張ブロックボランティア集会」に参加しました。

この集会は西尾張の各市町村社会福祉協議会が主催する行事で、当日は他のブロック行事が重なり、広報用資器材が不足し苦しいスタートになるかと思われましたが「パネルボード・非常持ち出し品・ろ過器、簡易コンロ、安全灯、被災写真・ロープワーク・NHK防災カルタ・非常食くリッツ>・手動ぶるる君」の展示等で防災について会場内の関係者にかなりのPRができました。

また、隣接ブースの「岩倉防災V.Cの会」「防災ボランティア IN SOBUE」との良い意味でのライバル意識があり、また懇親を深めました。

集会終了後は、同施設内で平成16年度新会員を交えた海部ブロック交流会（30名）を行い、自己紹介・各被災地救援活動報告・今後の活動指針等話し合うことができ、有意義な交流会となりました。



4. 名古屋ブロックだより

1. 17KOBE あれから10年～地震なんかにはまけないぞ！なごや～

阪神・淡路大地震で失ったものはあまりにも大きく、深い悲しみは消える ことはありません。しかし、私達に今出来ることは、同じような大災害が起こっても、震災からの学びを生かし、少しでも被害を軽減していくことだと考えています。下記のように5つの区では防災講演会・展示コーナーを行いました。その模様は次号でお知らせします。

防災講演会

1月20日	守山区役所	名古屋大学大学院教授	福和伸夫氏
1月23日	港区役所	名古屋大学大学院教授	安藤雅孝氏
1月29日	名東区役所	レスキューストックヤード代表	栗田暢之氏
1月30日	緑区役所	名古屋大学大学院助教授	飛田潤氏
2月6日	北区役所	名古屋工業大学大学院教授	谷口仁士氏

展示コーナー 「阪神・淡路大震災を知る、見る、語る。」

- ・ 県外避難者の記録・神戸の子供達の絵画展・ビデオコーナー阪神大災害の記録など
- ・ 名古屋はどうなる？名古屋はどうする？ もしも地震が起きたら、・災害ボランティアセンターの紹介
災害ボランティアの災害地での活躍・災害時要援護者コーナー



ブロック情報発信 6



5. 尾張ブロックだより

望月 晴夫

「あいち防災リーダー会こうなん」が昨年11月に発足しました。活動の内容の中で、一番に取り上げる行事は、10月1～2日「江南市制50周年市民まつり」が“すいとびあ江南”で開催され、あいち防災リーダーのブースを立ち上げて、なまず号体験・防災の歌「仲良しお隣さん」の発表会を歌手の樋口三紗さんに登場願って歌唱指導をお願いした。

地震発生メカニズムのパネル・ぶるる君・非常持出袋・耐震診断のすすめや「こうなん」の智恵を絞って作った「まさかの時に役立つ」リーフレットを参加者に手渡しました。

「こうなん」のブースは少し離れていた場所でしたが、雨の中2日間で約1200人の参加がありました。

<左から>
なまず号
市長へパネル説明
「こうなん」
スタッフ

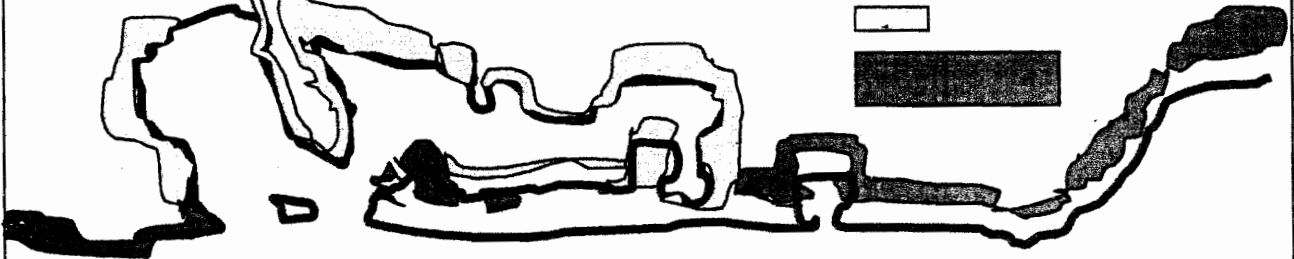


6. 東三河・新城設楽だより

広報 酒井 修

東三河に津波（東海・東南海）が襲来したら・・・（遠州灘沿い地域は海岸に同報無線が装備完了）

東海地震津波到達予想地域（海拔の低い地域）



正月に暇に任せて「海岸めぐり」をしました。名古屋を除く遠州灘を車で日帰り3日間、海と生活状況をレポーター（旅人）になりすまして・・・、その結果、むろん正確ではありませんが、思いつくまま書いてみましたが、遠州灘沿いはスマトラ状態です。津波が堤防を超えたら、河川浸水防止扉、0m地帯など、心配が一杯です。逃げようにも高いところやビルは10分以上、高齢や要介護の方を、だれが・・・。ご近所で役割訓練が必要があればと思いました。

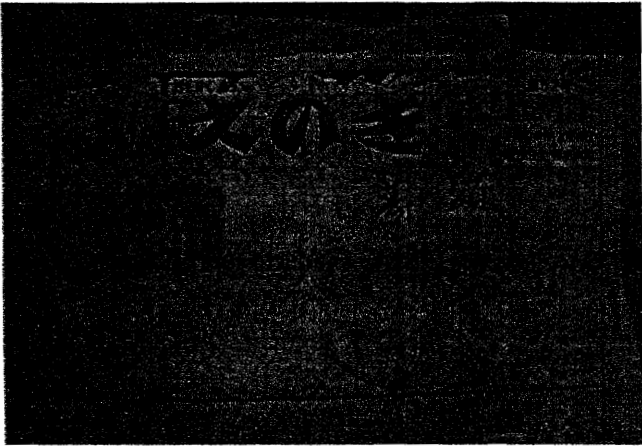
2月12日（土）13：00～田原市文化会館において

「地震防災セミナー」主催 東三河地域防災研究協議会

協力 豊橋技術科学大学 地域防災リサーチ・コア

コミュニティと防災

安城市「榎前」地区
田原市「やくま台」地区



安城市 間瀬さん提供

安城市榎前地区では、ご近所ふれあい活動として生まれたコミュニティの「ふれあいえのき」紙の発行が52号を数え、地道な活動が市社協から助成を受けるまでに発展しています。そこへ防災リーダーの方々が多様なアイデアで啓発、救助、救急と地域の方々と共に共有活動化に実績をあげています。この広報紙は手づくりで、情報とインタビュー、趣味から児童・青年・婦人・老人に、足と信頼で記事を集め、地域にはなくではならぬ「ふれあい」となっています。

田原市やくま台自主防災会では、年間活動計画の中に防災組別懇談会を実施しました。6月～17年/2月まで毎月第1日曜日に開催し8回目が終了しました。右図のように大赤丸の高齢者や要介護者が多く、急速な高齢化の縮図状況です。(やくま台 酒井)



防災懇談会開催状況

6月	28世帯	11月	28世帯
7月	27世帯	12月	27世帯
8月	28世帯	1月	28世帯
9月	29世帯	2月	27世帯
10月	27世帯	合計	249世帯

参加率 1月現在 95%

＜講習会内容＞

- ・ 地震について (自主防災会 役員)
- ・ 地震津波メカニズム (防災リーダー)
- ・ ビデオ鑑賞 (市防災対策室)
- ・ 家具転倒防止 (防災リーダー)
- ・ DIG (防災リーダー)

＜開催時間＞

- ・ 各月 第1日曜日 午前9:00～11:00

＜今後の課題＞

- ・ 防災会の消火・救助・救護訓練、防災住民台帳作成、安否確認、家族連絡方法の確立



みんなで「町内は・・・ご近所は・・・」

＜その他＞・寿会へ講習会

各年1回・子供会と防災リレー大会

・若者防災協力者育成

⑤愛知から始まった日本の防災

名古屋大学大学院環境学研究科 福和 伸夫

愛知防災リーダーの皆さん、あけましておめでとうございます。

昨年は、度重なる豪雨、台風の来襲、そして地震と、まさしく「災」の年でした。特に、年末に発生したスマトラ地震の被害の甚大さは、想像を絶するモノでした。前回の「防災よもやま話④」で、東南海地震の津波の教訓を解説した後だけに、本当にびっくり致しました。

正月を応急仮設住宅で過ごした、中越地方の方々や、豪雨・台風災害に被災した方々、そして、インド洋周辺で被災された多くの方々に、お見舞いを申し上げたいと思います。

私たちは、これらの災害を我がコトと受け止め、これからの災害を少しでも軽減するよう、できるだけ多くの教訓を学んでいきたいと思います。そして、「災い転じて福となす」よう、日頃の啓発活動と備えの活動を通して、地域の防災力をアップさせていきたいと思います。その中心的な役割を担って下さるのが、あいち防災リーダーの皆様です。

さて、今回の話題は、「愛知から始まった日本の防災」です。

名古屋圏は、我が国随一の産業拠点であり、約1000万人が住む我が国第3の都市圏です。気候に恵まれ、豊かな土地柄です。しかし、一方で、数多くの自然災害に見舞われてきました。明治以降だけでも、死者1000人を超す3つの地震災害（1891年濃尾地震、1944年東南海地震、1945年三河地震）と、1959年伊勢湾台風や2000年東海豪雨などの風水害に襲われています。

濃尾地震は、内陸で起きた過去最大の地震です。根尾村（現本巣市）美鳥に高さ6mの断層崖を作り、美濃から尾張にかけて甚大な被害を与えました。まさしく、「身の（美濃）終わり（尾張）地震」でした。この地震では、明治以降に導入された煉瓦造などの西洋建築が大きな被害を受け、西洋文明の安易な導入に警鐘を鳴らした地震でもありました。当時の政府は、この地震を契機に文部省に震災予防調査会を設置しました。震災予防調査会は、地震学や耐震工学の礎となった組織であり、数多くの貴重な研究成果を残しました。この組織は、関東地震の後、東京大学地震研究所へと発展的に解消をしました。万一、濃尾地震が発生したときに名古屋大学が存在していたら、地震研究所は名古屋大学に作られていたかも知れません。

太平洋戦争中に発生した東南海地震は、真珠湾攻撃（12月8日）の4周年記念行事の準備の最中の（12月7日）お昼時に発生しました。当時は、戦時統制下のため、被害資料は十分に残っておらず、一般住民には災害情報が十分に行き渡りませんでした。翌週12月13日から、本格的な名古屋大空襲が始まり、翌年1月の空襲は9回を数えたそうです。さらに、1ヶ月後の1月13日には三河地震が発生しています。1944年末期から1945年初頭にかけての地震と空襲の続発によって、名古屋周辺の軍需施設は壊滅的な痛手を被りました。この東南海地震と三河地震における建物被害の教訓は、1950年に作られた建築耐震基準にも活かされています。すなわち、耐震工学の基礎になった災害と言えます。

さらに、戦後に発生した1959年伊勢湾台風での被害は、死者5,098、全壊家屋833,965にものぼり、戦後最大の自然災害となりました。これを契機に、災害対策基本法が制定されています。まさしく、我が国の防災対策の原点となった災害と言えます。ちなみに、名古屋大学の土木工学科も、伊勢湾台風後に設置されました。

このように、我が地は、度重なる災害に見舞われ、それを教訓に地震学・地震工学・耐震工学が芽生え、さらに、我が国の防災体制が確立しました。私たちの地域の災害を教訓にして、他地域の災害が軽減されたわけです。今度は、逆の立場になって、私たちが、他地域の災害を教訓として我が地の災害を軽減しなければいけません。昨年発生した様々な災害を教訓にして、私たちの地域で、災害が起こる前の「備え」のモデルを作ろうではありませんか。そして、「地震」という自然現象が発生しても、「地震災害」という社会現象を発生させない方法を作り、広く他地域に広げていこうではありませんか。あいち防災リーダーの会の知恵として、少しずつ作っていきましょう。